

---

# Non title 1

逢瀬悠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Non title 1

### 【Nコード】

N6187I

### 【作者名】

逢瀬悠

### 【あらすじ】

ありふれた人間の現状

2009年の夏

海にポツンと浮かんでるだけの日本で、僕は僕自身という人間の取るに足りない22年間を今日で終わらせようという結論を導き出した。

或いはこれは必然かもしれない、偶然に見えた幾つもの必然が絡み合って結局はここに辿り着いたって具合に。

振り返るような出来事も人並みにはある。ただ人並みでしかないという事実、1人の人間が日本という国に産まれた場合、その身に起きるであろう出来事。

咲き乱れすぐに散る桜の花びらの中を真つ黒な服を着て歩いた、または馬鹿の1つ覚えのように照りつけるだけの太陽の下を、褐色の渴き切った枯れ葉の上を、斬りつけるように吹き荒ぶ冷たい雪風の中を。

友人と呼ぶべき他人もそれなりにいた。恋と呼ぶべき感情も何度か抱いた。家族と呼ぶべき人間も勿論いた。

ただそう呼ぶべきなんだという事以外にこれらの人間達をそう呼ばなければならぬ理由は思いつかなかった。

それも今だから言葉に出来るのだろう。

2009年8月13日、埼玉県秩父市のとある山中の駐車場、真夜中2時過ぎ

星も月もみえない本当に真つ暗な闇の中。風もそよいですらない静寂の中。そんなすべてをよりはっきりと印象づける生い茂った林の中で、2年前に買ったギブソンのSGとノルウェイの森上下巻とよくわからない名前の日本酒とコカ・コーラとどこのメーカーかわからないビールと約五千円分の市販の睡眠薬、錠剤のタイプやドリンク剤のタイプ、これらを助手席に置いて今独り闇の中にいる。

果たしてこれは致死量に値してるのだろうか、とりあえず睡眠薬の

パッケージの裏に『アルコールと一緒にには飲まないで下さい』って書いてあるし、ざっと50錠くらいは錠剤があるしまあ大丈夫だろうと思った。

それに別に死ねないなら死ねないで別に良かった。別の痛みのない死に方を探せばいいだけの話なんだから。

それにしてもなんだか味気ないなと僕は思った。僕が想像していた死ぬ前に起きるであろう感情の起伏が全くと言っていいほどない。過去の楽しかった事、辛かったけれどそれ故に今は良い思い出となった種類の事、今までの人生、それらの遺物にまず自分自身で触れられると思っていたのに、どうやら走馬灯とは生き残ってしまっただけの人間が創造したもののようだ。

そういう事物が世の中には多すぎる。どれが本物でどれが偽物かなんてわかりやしない

まず何が本物で何が偽物なのかってゆう定義すらまともにできちゃいないんだ

それが社会とゆう人間の偽善の集大成とも言える仕組みの本当のところだろう。

人はみんな平等であり1人として同じ人間はいない。そんな上辺だけを指先でシユツと撫でただけの道德観で均一化と統一化をはかれると信じてやまない病める拙い理性をもった猿。こういった人種で溢れ沈みそうな国日本

だいぶ脱線してしまっただけれど兎にも角にも僕の死に対する甘美な妄想は皮肉なことに死のまさに目の前で破滅した

まあなにはともあれ夜のうちに済まそう。

男は一度決めた事はやり通さなきゃいけないらしいから

8月14日

母親と父親と弟が車の中で横になっている。

今日は確かバイトがあるからにはやく帰らなきゃいけないのになぜか目覚めてくれない

駐車場の向かい側にある公園に父親と妹の姿がはつきりと見える、父はとても穏やかな微笑みを自分の娘に向けていた。妹はまだその視線の意味を理解できずにただ本能で安らぎを悟っていた。そんな情景はぼくに「まあバイトくらいいいかな」って気にさせた左右のポケットを探って右ポケットから携帯電話を取り出しバイト先に休ませてくれと電話をした

どうも勘違いしていたらしく今日はバイトは元から休みだった。なんだか意識が朦朧として足元もまったく覚束ない感じではあったが目に写るものはすべてハッキリとしていた。公園から駐車場に停めた車を眺めると中には誰も乗っていない。バイトがないとは言えこんなところに長居しても退屈なだけだったので母に電話して車に戻るよう言った

何故だかはその時の僕には全くわからなかったが僕の話は一切母に通じなかった。

僕は次第に苛立ち声も大きくなっていった

「だからもう帰りたいからはやく車に来てくれよ」

「だからさつき車にいただろ、はやく来てくれよ」

等々を喚いてみたが向こうはより混乱していた

電話に父がでた、とりあえず誰か周りに人はいないのかと聞かれたので周囲を見渡すと公園内で有料で自転車を貸し出してる店がありその建物に人がいた、表情からは忙しさの欠片も感じ取れなかった。とりあえずその人に替わってくれないかと言われたのでそいつに携帯を渡した

父がここの正確な場所を知りたがってるのでお手数ですがとか言ってる。そいつは2、3分話すと電話を僕に返して店にある電話で誰かを呼びだした

携帯はまだ繋がったままだったので呼びかけると父が今公園の係員の方が来てくれるからそこで待ってなさいと言い電話を切った

正直誰をもしくは何をどんな理由で待たねばならないのかはわから

なかったが言われるままにしていた

係員の人が着いて来てくれと言うので彼の車に乗り少し離れた所にある体育館のような建物にいった

彼は僕にお茶を買ってくれ、今幾つなのかとか、大学生なのかとか、高校はどこで部活はなんだったのかとかを聞いてきた

なんでこいつがそんなこと知りたがってるのかはわからなかったが、特に僕個人に興味があつて聞いているわけではないことはわかった。まあ暇だったしお茶の恩もあるので話してやった、22で都内の大学に通つて、高校では野球をやつていたと

彼は40代前半に見えたが彼も高校の時野球を

やつていたらしく微かに親近感を覚えた

たったそれだけの繋がりだった。が妙に心が軽くなった

そしてほぼ同時にそれくらいの距離感を誰とでもとれるならきつと何年生きても楽だろうなという思いが胸をよぎった

やがて父と母が僕を迎えに来たらしく彼にどう見ても大袈裟で仰々しく礼を言いお茶代を手渡し僕は自分の足で歩いて両親の車へ向かった

ぼんやりとした意識ではあつたが次第に霧が晴れるように僕は現在置かれている状況を把握してきていた

ああ俺は失敗したんだ

またあのレールに両足をガチツとはめ込まれてただ息をするだけの毎日に連行されるんだ

運転席では父親がなんだかんだと言つていたが僕の頭の中はまた一つ決めた事をやりきれなかった悔恨の念と自殺1つまとものにこなせなかったという情けなさで満ちていた

そして直ちに次の手を探さねばという明日への唯一の希望を胸に、言われるがままされるがままに横たわつていた

家につくと様々な質問責めが待つていた

お前の車の中の薬はなんだとか酒を呑んで運転してたのかとかあのコンドームはなんだとか大学卒業はできるのかとか就職する気はな

いのかとか

鈍く回る血液を感じながら薬は死ぬために酒はその手助けにコンドームは誰かとの性行為のために大学は1日もいってないから卒業できないし、だから就職も自ずと無理だと言ってみたくなくなった

だけどそんなことをあからさまに人に言える心があればまず人は自殺なんてしないだろう

すべて適当に答えておいた。順調な人生を歩んでいる人間が言うような言葉を寄せ集めて声にだした

最近夜眠れなくてさ、酒は友達の家で呑んだ残りでコンドームは彼女とやる時のためだよ

学校は心配ないよ、就職も今受けてるところがいい感じだから大丈夫だよ。とかなんとか

さして説得力のある嘘とは言えないが結局のところ向こうとしてもそういった言葉を聞いて自分を安心させたいだけなのだからこの程度の嘘で充分すぎる程だった

真正面から嘘をつかれるとは想像もできないほどに衰弱した想像力と、今日という1日限定の安心感のためなら明日の身のことなど厭わない糞れきった精神のせいだろう

それは僕自身のせいであり、彼等自身の認識不足のせいでもあるこれは珍しいことではなくどこにでもある家庭内の絵図だと思ってお前のためが自分のためであることにすら気づけない、気づこうとしない、自分を疑う、省みることができない種類の人間、いざ何か深刻な悲劇が起き自分に責が置かれると卑屈になって嫌みたらしく自分の非をあたかも身体障害のように見せびらかし同情と憐れみを獲ようとする、壊れたテレビのように人を苛つかせることしかできない種類の人間

そういった人間が1人の人間の親になり子は親を見て育つ

その子に賢さがなければ或いは人生は幸せなだけの時間だろう

しかし気づくべき人物ならば遅かれ早かれ気づき絶望し、憎悪と無力感の中をさ迷うことになる

それは無数の鋭く尖った針が風に舞う中を裸同然の姿でさ迷うが如く痛みを伴う

誰が好き好んでそんな事をなんの為にするんだらう

くぐり抜けた先にモニカベルツチが裸で横たわってるわけでもないのに

他人が何故あんなに呆気なく生きて働いているのかが全く理解できなかった

同級生が流行を追いかける一生懸命さも午後の談笑の面白さも何一つ同じようには感じれなかった

いや、ただ感じたくなかっただけかもしれない

幼い日々に見た数々のヒーローと、思春期に知った人々の輝きがそうさせたのかもしれない

それすら何も無い空白な自己を埋め虚しさを紛らわす為の延命措置かもしれない

何一つ確かなことはない。ただこの島国の真ん中らへんに小さい砂粒がある

それが自分でそれ以外に見るべきものは何もないように思えた

会話という事象が最早対象が誰とであれ意味を成さなくなったと思

い僕は両親を安心させ二階の自分の部屋へ行きただ目を閉じた眠ろうとしたわけじゃなく目を開けているよりはなんとなく楽だったから

このなんとなく楽そうだという思考からはじき出した結果が薬物による自殺だ

だがそれも失敗に終わってしまった今では滑稽に響く

それでも尚衝動は続く。紛れもない逃避を行わせるための衝動

その夜偶然か両親の策略かはわからないが親戚の叔母と従姉妹とで食事に行くことになった

行きたいとは全く想えなかったが明日の為に今は正常である自分を彼等に印象づけておくことが必要だったので笑って首を縦に振った酒も飲まないのに居酒屋にいった。料理が美味いから来たらしいが

何を喰つても対した印象は受けなかった

なんやかんやと話している、または話しかけられている、内容は覚えてない。

無駄に薄暗い店内と黒に限りなく近い焦げ茶色の木の壁、その中でまた無駄に明るさを装う定員、マニュアル通りではないことを立証し好印象を与えようというマニュアルに乗った姿勢

どれもが鬱屈とした気持ちをさらに悲惨なものとした。暗く深い井戸の底で文字通り針の穴ほどの点と呼ぶにも満たない光の粒を見上げるような心持ち

冷たい水は肩まで満ち容赦なく体温を奪う、周りには足が何本あるか数え切れないような虫が無数の影となって蠢く

どこに救いがあると言っただろう。大声で助けを求めるか、達観した人間になりきって無駄な祈りを捧げるか

まあもうどうだっていい気もするな

食事を終え家に帰る道中隣に座る弟だけが気がかりだった

5つ歳が離れたいたのだけれど、仲は悪いわけではなくむしろ良かったくらいだと思うがお互いあまり家では口数が多くないため大した会話はしなかった

喧嘩というような大それたコミュニケーションもなかった気もする幼さの真っ只中の時期でさえ数える程しかなかった。彼は無条件に兄を信頼し敬っているように見えた

それを感じとれるようになった今でさえ彼にすら何一つ不都合な事実を話せないでいる

不都合なのだから話しにくいのは当たり前だが言った自分ではない人間に言ったところで何も変わりはないという観念に捕らわれて結局は他愛ない話ししかなかった

僕はそれもあり彼に対して何か引け目や負い目を感じていた。さらには幼い日々彼に与えた傷。人によればよくあることだと割り切れないこともない事実だか僕にとってそれはトラウマと呼んで差し障りない程の出来事だった

今でもありありとその光景を思い出すことができる

歳の程はよく覚えてないが僕が8つか9つの時に夜中弟と一緒にトイレに行き2人で面白がって1つの便器に向かって放尿していた  
とりあえず用を済ますとパジャマのポケットに母親の結婚指輪を見つけた

なぜ僕のパジャマのポケットにそんなものがあつたのかは記憶にない  
がそれを弟に見せびらかしていた

弟ははにかんでそれをもつ僕を見ていた、指輪を人差し指にはめようとして手を下に向けた瞬間

指輪は重力に抗うことなく従って便器の中へ吸い込まれていった  
カラン、カランと便器の中を跳ねて音もなく着水し見えなくなつた  
ハツとして馬鹿に大きな声を出してしまい母親がトイレまで来た  
僕は嘘をついた。母親がくる数秒間の間にもう計算はできていた、  
怒りの密度、それによつて自分が受ける被害、そしてそれを避ける  
ためにしなければならぬこと

どうしたのと尋ねる母親に真正面から完全なる嘘をついた

「弟がお母さんの指輪を落つことしちゃつたんだ」

僕はその瞬間の彼の表情を覚えてはいない、ただその直後に彼はただ叫ぶように泣いた。その涙は単純に母親から叱られたから流れたのか、まだ呼び方も知らない裏切りというものを実の兄から受けた  
悲しみからなのかはわからない

弟はこの出来事を覚えているのだろうか、覚えているとしたら彼は僕に対してどんな認識をしているのだろうか

そんな疑念はありつつもやはり彼は僕に対して全くの無防備であるように見えた

いま彼に対してまたあの日のような裏切りを行おうとしているんだろうか

友人よりも恋人よりも両親よりも彼に与えてしまう影響を恐れた。

しかしそんな恐怖心すら自分自身の保身のためには取るに足らぬ些末な一時の気のそよぎに過ぎなかつたんだろう

家に着きまた階段を上り部屋へ行く

もう考えを脳内で巡らせることにすら飽きた。カーテンは閉じたまま電気は消されたまま唯一の娯楽であるSGも助手席に横たわったままに眠りを求めた

眠気はなく、ただ体がだるいだけ。頭はやたら重く胸が異様に苦しい。きつと煙草の吸いすぎだと結論づけ思考をやめる努力をした眠りについたという実感を伴わないままに朝がきてしまった

カーテン越しに白く淀んだ光が見える。光は部屋中をぼんやりと照らしている

床を埋め尽くした漫画本や小説。CDやDVDや古いビデオや着古された古着、積もり積もった灰皿に乗っかられた小さなアンプ。埃が微かに積もったマルチエフェクターに何も乗ってないギタースタンド、冬になるとコタツにもなれる小さなテーブル、その上に散在する放置されすぎた幾つものコップと法律の教科書、鎮痛剤とレシート、棚の上の無数のブラックニッカの空き瓶

すべてがありとあらゆる感情を刺激し荒れ狂う波になりもう自力では引き返せない場所まで僕という存在を押し流した

黒いデニムを履き黒いロンティーを着て顔も洗わず歯も磨かず髪も整えず朝食もとらずサンダルを引っかけたチーターに追われる草食動物のように家をでた

たまたま庭にいた父親にオハヨウを投げつけた。一切の接触を避けるため、これ以上間違わないために。

車のドアを静かに素早く開け運転席に滑り込みエンジンをかけた庭からバックで外にでて死に場所を探しに向かった

何一つ当てはなかった。とりあえず邪魔が入らぬようにと携帯の電源を切りニルヴァーナのCDをオーディオに突っ込みポリユームのつまみを軽く中ほどまで捻った

音量は充分すぎるくらいにあがった。自分の車の走行音も周りを走る車の音もかき消してくれた

カートコバーンの存在を大学に入っただけの時期に知り彼の音楽

も知った。何を歌っているのかもわからなかったし、何が凄いのかもわからなかった

ただ彼に惹かれた。その理由は至ってシンプルであるが故に浅ましく今となつてはその時の自分が疎ましいくらいだ

その理由とは彼がショットガンの引き金を引き自らの頭を自らの意志でぶち抜いて死んだということ。

彼がもうすでに死んでいるという事実。もう誰も彼に触れられないという事実。それらが僕を魅了した。すごい人なんだと思わせた。ただ彼のようにになりたいとは思わなかったし、絶対に無理だと思っていた

彼を理解したいと望んではみたが結局は過去の事を蒸し返すだけだと諦めていた

そしてしばらく彼の声に耳を塞いだ。というよりはごく自然に適切な距離をおいたと言えるだろう

しかしどうしても彼が存在したという過去は僕の中で消えなかったし、無闇に忘却の中に消したくはなかった

自らギターを弾くようになりそれなりの技術を会得してからも僕は僕の中に居続けた

僕が自ら鳴らす音に彼の影響は恐らく微塵もなかった。客観的にみてもそれは明らかだった

ただ1つの音楽の実行犯になつていくという部分において僕は彼を思い出さない訳にはいかなかった

彼に憧れ音楽をはじめた訳ではない

しかし僕は彼を知ってしまった。知りたがつてしまった。そうなた以上音楽に人間の醜さを認めることは出来なくなった

自分自身の醜さも、赤の他人の醜さすら笑えない冗談になつてしまった

今また彼の音楽に耳を傾ける。涙もでないほど心安らいている自分に気づいた

彼を少し理解できたような気がしたし、自分勝手なのはわかってい

るが親しみを感じた。今生きている人間の中の誰よりも  
ただ引き返すことはできない。途中道端のコンビニに寄ってコーヒ  
ーとカッターをひとつずつ買った

これでまあ準備は整っただろう、後は相応しい場所を見つけること  
だと思いコンビニの駐車場で思いを巡らせた

何故だか無性に海が見たくなった。そう言えば海なんてもう六年近  
く見ていなかった

泳ぐのが嫌いなわけでもなかった。ただなんとなく行く機会がなか  
っただけだ

海ってどこにあるんだっけなと思ったが地図を見にコンビニの店内  
に入るのも面倒だったしそれに地図とか地理とかは大の苦手分野だ  
だったので

勘を頼りにしてみることにしてその場所を後にした

まあ海なんだからとりあえず端っこを目指せばいいだろうと考え国  
道をひたすら真っ直ぐに走った

そのうちきつと海があるって感じの名前の都市がブルーの標識にで  
るだろうと確信していた

無根拠な自信のみで確信に至れる自分の先天的な楽家ぶりに多少  
嫌気がさしたし、なぜ対人関係においてこの楽家ぶりが発揮でき  
ないのかとまた自己嫌悪に陥ったがもうそれもどうでもいい事柄に  
成り下がっていた

結論から言うと面倒なんだろう。どんな人間にもオープンでない  
と気が済まないくせに些細なことでふさぎ込みかなりズレた妙なこ  
とで逆上してしまう自分自身と逆上しても次の瞬間には何事もなか  
ったかのように促してしまおう自分にほとほと疲れ果てた

さらには臆病で痛がりな上に病的な嘘つきである

反射的に嘘をついてしまうのであって意図的ではないのかもしれない  
いが、意図と関係をもたない言葉があるのかどうか極めて疑わしい  
まあ何はともあれこれも大多数の中の1つにすぎない。似通った人  
間の似通った1例だ

車を走らせるうちに日は沈みだしあつという間に夜になった。

今どこに自分がいるのか、ここまでどのような風景を通り過ぎてきたのか全く思い出せなかった

そして海の気配はまずどこにも感じられなかった。

車を走らせながらブルーの標識を見てみると仙台と書いてあった。

仙台に海はあつたつけなと考えてみたがなんとなく無い気がしたし自殺するにしている仙台はこれもまたなんとなく相応しくない場所な気がしたのでそのまま道端の飲食店の駐車場に入り旋回してとりあえず引き返してみることにした

深い溜め息をついた。溜め息をつくときと幸せが逃げると誰かが言っていたのを溜め息を吐く度に思い出したが逃げて困るような幸せがあるとは毎回思えなかった

そもそも本当の幸福というものが二酸化炭素を普段の呼吸より幾らか多く出したからって取り消される程度の事物なら誰が追い求めるっていうんだらうか

そもそも諺もこうして綴っている言葉すらもどこかの過去で不特定多数の誰かが作った法則に過ぎないと考えられはしないか

だとすれば人間自体を信じられない人間は何を信じるべきなのか行動が行為か眼前の事実か普遍的真理か物質そのものか、或いは動物的な本能ならそれに値するのだらうか

それを信じてそれだけを突き詰めて行動すれば個人の生活や未来とやらは切り開いていけるのか

まったくもって面倒くさい現在の思考能力に呆れ、答えがなければ声も出せない無力さが恥ずかしくなってきた

とりあえず今日のところは眠ろうと思いついどこか長時間駐車できる場所を探し始めた

ほどなく山中の道路脇に無料の駐車場を見つけた。なかなか広かつたし今日はここで眠ることにした

清掃が隅々まで行き届いたトイレとジュースの自動販売機があった。ふと誰がこんな場所にあるトイレを掃除してるんだらうと思った。

そんな仕事があるなら俺にやらせてくれないだろうかとも思った。単純にとてつもなく気楽そうだし、人気がなく美しい緑に囲まれた場所の小さなトイレを一定の清潔さに保っておけばいいだけの労働ならば肉体的にもこの上なく楽そうだ

明日僕はどこへ行くべきなんだろうか。海を目指してはいいるものの典型的な方向音痴である自分はなくねと曲がったりできない。

曲がるにしても直角に真っ直ぐに曲がる。ガクツ、ガクツと客観的に見れば明らかに目的地にはたどり着けそうにない矛盾を抱えた曲がり方しかできない

明日僕はどこへ行くべきなんだろう

8月13日に見た幻の理由を探ってる途中に気休めにもならない一瞬の眠りが訪れた

翌日朝の6時半ごろに目が覚めた。3時間くらいは眠れたのだろうか。睡眠をとったんだという感覚を僕の体中の細胞達は少しも覚えていなかった。

これ以上ないほど口をひるげ長い欠伸をした。両手を赤ん坊みたいに突き上げて体を反れるだけ後ろに反った

6、7秒間目の前の空間をぼけつと見つめた。思考はほぼ停止し心臓もこのまま止まってくれるんじゃないかというくらい大人しかった。

そんな静まりきった精神と弱々しい血液の流れを微かに意識しながら意図はまるでないままに助手席を横目でみた。

そこにはあの日と同じようにSGとノルウェイの森上下巻があった。いつかと同じようにニルヴァーナのCDがあった。昨日と同じように飲みきれず中途半端に残った睡眠薬の錠剤があった。そして105円で買った安っぽい黒のカッター

それらが視界に入った。一瞬にして心臓に薄い氷の膜がはったような喪失感に襲われた。今はじまったばかりの僕の今日と。今日終わらせようとしている僕の明日。認識は鋭い感覚を伴って今はじめて為された。

想像せずにはいられなくなった。想像というものが現実に及ぼす作用の大きさを知った

きつとそれは歪に笑う三日月の下。歩道に散らばる煙草の吸い殻のようにバラバラに千切れた星の下。それらすべてを黒い磁力で宙に吊す闇の下。玩具のようなカッターを手にし、左手首の一番血が流れていそうな血管を右手の指先で探し、おおよその見当をつけ冷えた切っ先をその場所にそつと触れさせる

歯医者に犯される幼稚園児のように頭の天辺から爪先まで力を入れてシートにもたれかかり瞼を小刻みに震えさせ荒くなる呼吸にことさらに怯える

刃物を握る指先に力を入れ左手首の皮膚に差し込み真横に思い切りスライドさせる。

血が吹き出し車のフロントガラスに赤い斑点が飛び散る

シートは赤く滲み僕はそれをただ見ている。ただただ赤の赤さを見ている

その瞬間を僕はどんな気持ちで過ごしているのだろうか。

それだけは今わかってしまいたくはなかった

朝日が眩しい。突然頭の奥のほうで何かに強く圧迫されたような感覚がして、吐き気と目眩に襲われた。とっさに窓をあけ外の空気を目一杯吸い込んだ

緑に囲まれているからか山中だからなのかはわからないが空気はひんやりとしていて器官を通るとき心地よかった。

澄んだ空気は先ほどの頭の圧迫感をいくらか紛らわせたようで僕は再度海へ向かうことにした。

それに今の僕にはそれ以外の選択肢はなかったし別の選択肢があったとしてもそれらを選ぶ能力は持ち合わせていなかった

運転席のドアをあけてトイレへ行ったのだけれど手を洗ってる最中に昨日とは違った印象をそのトイレから受けている自分に気づいた。

夏の朝の光に容赦なく照らされたその空間をよく見ると隅々には蜘蛛の巣がはりめぐらされ、小さな虫の死骸がそこそこに落ちていた

個室のトイレには誰かが捨てた成人雑誌やら週刊誌やらが放置されていた

目を疑う前に記憶を疑った。昨日見たここは本当にここだったんだろつか。どう考えてみても同じ場所だし1日でこんなにも汚れてしまうものなんだろうか

とても信じ難い。昨日見たものが幻でないなら今見ているものが幻なのか、それとも単純にそのトイレにとって夜から朝までという時間は汚され続けるだけの日常なのだろうか  
虫や動物や自然、そして人間にさえも。

水は止まったり流れたりを繰り返している。真正面の鏡の自分からなかなか目をそらせない

今にもしゃべりだしそうな彼の目は底なしの沼を連想させるほど淀みすべてを飲み込みそうなほど黒かった

人が入ってきた足音ではつとしてやつと鏡から視線をはずせた

やっぱりこうなった。戸惑いが芽生えはじめている。もしくははじめから戸惑いを抱いていたのかもしれない

どちらにも行きたくはないという心と、どちらかに行きたいと地面に膝を突いて 額を砂にすりつけるようにして祈るような心

どこへ行くべきなんだろう。破裂しそうなほど膨張しつづける思考に頭を痛めながら車に乗り込みキーをまわした

海へ。海へ向かう。答えを探しに行くわけじゃない。答えが見つかるなんて思っていない。ただこの目で海を見るために、この鼻で海の薫りを吸い込むために、海という存在の中に心を浸すために

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6187i/>

---

Non title 1

2010年10月12日06時58分発行